

## 幼稚園の改造意見

東洋幼稚園牛込分園長  
久門嘉祐

改造は、もう世界のあらゆる方面に響き渡つてゐるのである、勿論幼児教育としても此響きに醒めざるを得ないのである。さて、どう此響に應ずるかといふことに對しては自分は十數年來の實驗研究に照して「玩物の教育」といふ改造を提供するのである。

### 一、「玩物教育」の特色

- (1) 經費は已に活きた遣ひ方であるから無駄がなく、随つて效能が直に表はれる。
- (2) 玩物を充分豊富に供給しても經費は却つて各園で従来よりも必ず軽減する。
- (3) 玩物の教育によれば幼児の遊びが自然で圓滿で愉快である随つて神經質的消極的に監督する事情が段々に殆んどなくなる、それに人が相手になり人が遊ばせるので玩物に代るのであるから人手が少くて濟むことになる。
- (4) 幼兒は自分等の眞の生活を得るのであるから

非常に満足なるのみならず、それを監督してゐる先生保姆が自然に幼兒の發達を日々に取る如く見ることが出來て非常に愉快である。此點は確かに教育者に對する最大の慰安である、始めて天職といふ味をしめることが出来る。

(5) 子供は玩物に對するときは眞である玩物は實に子供の心の鏡であるが故に其舊性觀察には非常に輕便で又決して誤らないのである。

(6) 玩物の教育は已に子供の眞を握つて居るのであるから實に萬世不朽である、世が如何に變遷しても、又如何なる新思想が輸入しても決して驚く必要はないのである。

(7) 玩物の教育は決して面倒なものでも、又決してむつかしいものでもない、寧誰れにでも頗る容易に出来る唯人によつて多少上手下手がある位のものである。

(8) 甞物の教育は保姆先生としての働きが雷に幼稚園に奉職中だけ役に立つといふやうなことでなく他日或は現在子の親として日々我子の幸福を増進するの徳を得るのである。

以上は唯甞物教育の結果として表面的な效能であるが又内面的には概ね左の如き偉なる効果を收め得るのである。

改造は急務であると言つて決して慌てるには及ぶまい、各幼稚園の都合で一づゝ出来易い事から確實に改造して行けばよいのである、而して先づ過渡期として多額の經費を要することや又理想上のこと等少數幼稚園にのみ可能といふやうな事は暫く措き、どの幼稚園にも必ず賛成があり直に實行も出来而かも効果の絶大と信ずる改造意見について少しく論述せんぞす。

## 一、内面的改造各項

### 一、無信仰より國教的安心へ

西洋では兎も角教育の根柢を信仰に取つてゐる、其頭で日本の教育を見て直に奇異に感じ、子供の趨性如何といふことについて頗る疑惑を抱いてゐるら

しい。而しそれは誠に無理のないことであると思ふ日本の學校教育にはどう見ても無信仰状態であるからである。

而して日本には遠く肇國の始め、皇祖皇宗に依つて萬世不朽の國教的安心を授けられてゐるのである即ち明治大帝に依つて教育勅語として下し賜はつた御聖勅がそれである。苟も教育者たるものは此大御心に精神を安心し日々子供に接心して自然に子供の精神を養ひ健全なる思想、體軀を養成するといふことが我大日本の子供の教育の第一義である。こゝを深く心に刻み込んでおなければならぬ。不知不識享樂巧利といふやうな外道に這入り込んでゐるやうなことがあつてはならぬ。

### 二、束縛より解放へ

日本の五十年昔の教育は精神的な束縛教育をしたのが今日では形式的束縛教育に置換へをしたのである。今日の状態は決して自由教養でもデモクラシイでもない。殊に家庭教育に於ける今日の自由放任は、動もすれば家庭の無方針を暴露し子供を次第に悪化せしむるの患がある殊に目前の情愛の悪影響は又甚しいものがある。

又幼稚園に於ても、切に自由を唱へ、デモクラシイを鼓吹されて漸く小學校流の教授式を捨て自由に遊ばせるといふ傾向になつて來たのは誠に結構であるが、それだけでは唯形式上だけのことで眞の自由は得てないものである。一步進んで幼兒の體力能力道徳に信頼して眞の自由解放的養育を施さねばならぬ。即ち大人が神經的な小監督を捨て、子供の趨起を握る大監督の下に可成干渉を慎み、世話をせず、手口を出さず耳を掩ひ目を閉ぢて純然たる子供の天地で思ひ切つて活動をさせるだけの勇氣と設備が欲しいものである。而して保姆教師がこの大精神に基づいて監督をするならば、例令小學校流の教授式に依つたところで根本的自由發達は妨げられないで濟むのである。

### 三、幼兒教育より幼兒養育へ

大人は兎角子供を弱いもの無能なものとして待遇するのが常である、子供のすることにはどうも満足が出来ないで批評したくなり教へたくなり口を出し手を出したくなるのであるが、それは子供にとつては、自分の境遇でない子供の生活でないことを大人から強いられる場合が決して少くない憾がある。

例へて見れば、丁度、子供が蟹を澤山取つて來て一生懸命石を積んで結構な巢を作つてそれに蟹を入れて置き、樂んで明朝行つて見ると何處からどう出たのか蟹はもう一疋もゐない。蟹の方では折角深切に巢を作つて呉れた好意には謝するのであらうが、どうもそれに安住することが出來ない、矢張自然に出來た石垣の穴や破瓦の下へ逃込んでしまふと同じ様である。實に馬鹿／＼しいことではないか。

幼稚園或は小學校に於ても兒童の自然の發達とか、自由活動とかセルフメードとか子供に眞の生活を與へよとか、教育するよりは先づ養育すべし、とかいふことは可なり古くから唱へられてゐることであるが、其言ふ人に然らばと成ると一向纏まつた方法がない爲めに唯理想議論といふに止まつて著々實行の運に向つてゐないのである。それがそんなに、むづかしく考へないで又多額の經費をかけないで研究に多くの頭を遣はないで今日只今からでも其一步は踏み進むことが出來るのである。即ち保姆教師が頭から教へる干渉し世話を焼くといふ態度を改めて、眞に子供の天賦の發達に信頼して頭を寧ろ空虚にし其保育法の如きは子供の日々の事實からヒント

を得る、大人が寧ろ子供に教はるといふ類になつて、子供の活動にびつたりとくつついてゐて充分に便宜を謀り介助し誘導する、こうなつて欲しい。要するに大人がつくつた大人の頭で教へたのでは役に立たない、子供自身が自然に發達する様に仕向けるのである。

#### 四、情的興味から理智的興味へ

日本の文明は未だ過渡時代として漸く大人が西洋文明の眞似が出来る位で、まだく日本から新機軸を出すといふことには、なつてゐない位であるから、子供は又遙かに後方に取殘されてゐるのである。

私の友人で日本居留の或西洋人の祕書役になつてゐる人の實話に曰く「西洋の子供は見上げたものだ」を振り出しに、「或日他所からお菓子折の到來があつた、其家の三人の子供は母にせがんでお菓子折を開いたが中味のお菓子はバラ／＼とテーブルの上に振りうつして箱を三人で奪ひ合つて持つて行き、小半日もかゝつて汽車と船と飛行機を作つて喜んでゐるのであつた、それが、かなり精巧なもので子供が菓子折の廢物で作つたものとは思はれない程であつた」といふのである。

此場合に日本の子供なら中味のお菓子を引つつかみそうである。そして又それが日本の子供の興味の中心であるとも思へるのである。即ち日本の子供の興味中心は總評的には情にある、延いては理智を暗まし能力を退化せしめ社會的公的發達を押しこんでゐるのである。此際是非理智的興味中心に立替へたい、而して、それが決して不可能なことではないことは勿論のこと、非常な困難事といふ程でもないのである、只赤坊の時から仕向方一つである。即ち赤坊のときから、順次進歩的に人がお守をする、人がお相手をするのを其時期／＼に適當な玩具にお守をさせ相手をさせる、又、一方お乳やお菓子に枯息に機嫌を取るのを玩具で徹底的に遊ばせるといふ風にして自然に理智の發達に誘導するのである。幼稚園に於ても、玩具に對し充分に共鳴し融和せしむるのである。

#### 五、虚偽から眞劍へ

日本の家庭は全部大人本位であるから子供の生活には不便不都合が多いのである、それでも家庭では敢て教育を標榜してゐるものでもないし、又餘り規律、形式的でもなく、それに子供には別に極まつた仕事

もなく、第一遠慮がない、こんなことから、子供は不完全ながらも子供の生活らしい生活をしてゐるのである、然るに幼稚園と自然に堅くなり大人しくなつてどうも虚偽に流れ遊びの爲に遊ぶといふ状態に陥り易いのである、昔福澤先生が子供に先生と言はせず福澤さんと言はせ子供の名を呼んで松太郎さん鶴子さんと言つたのも蓋し大に意義のあることであつたのである。幼稚園でも「さん」だけの敬語で満足したい、そうして先生の心と幼児の心との距離を縮めたい。そして心易い叔母さま、親類のお姉さまといふやうな親しみを持ち心から優しくする、其代り叱るべき場合には本氣で眞剣に叱るといふことにする。こうなれば遠慮と形式的威壓がされて天真爛漫に活動するやうになる。即ち子供は子供の生活を生かすやうになる一方法である。

## 六、大人の相手から畜物の相手へ

如何なる結構な主張があつても、それに具體的方法が伴はなければ何の效もないのである、よし如何なる科學的の案があつても根本的に大人が相手にになり、大人が教へるといふことを更めて畜物が誘導する畜物が相手になるといふ頭にならなければ決して

理想は實現されないのである。大人が教へることを教育であるを考へたのは全く誤謬である。大人が子供に智慧を授け善道に導かふとしても、如何せん人の心は動である、常に動いて極りないものである。

随つて子供の教育には不徹底に終るのが、寧ろ當然であるとも言へるのである。子供がそれを習ひ、それに模倣しやうとしても、お手本は已に動いてゐるのである、丁度赤坊の寫眞をとるごきのやうである、なか／＼ヒントを合はすことが出来ないやうである。而して畜物は即ち靜物である、いつでも同じ智慧と同じ感化を子供に與へるのである、お人形はいつでも同じ顔をしてゐるといふ風に畜物それ／＼の特長に依つて徹底的に子供を刺戟するのである。而して人ならば教へた通り覚えよ、言つた通せよ、と迫るのであるが畜物は決して強ひない、即ち獨樂にしても上手に廻はして呉れ、ば上手に回はる、下手なら下手にまわる、獨樂には何等不平のないことは勿論子供も上手にまわつても下手にまわつても各々力に應じて満足するのである、如斯く畜物は各程度の子供に順應するのである、それが人が子供の發達を見たやうな間違は決してない、いつでも適中してゐ

るのである。要するに従来は先生保姆が子供に直接であつたのであるが、先生保姆即ち大人が翫物の背後に位置して保育の大原動になるのである。

## 七、教具から翫物へ

従来幼稚園に於ける翫物は、翫物的生命を失つて教具になつてゐるのである、大人が教へる頭で考案して翫物を又大人が教へる頭で使用されて居るのである、遂に子供に親しみのない子供の生活とは没交渉のものになつてしまつて居るのである、大人の頭でこんな物が教育上有益であるなどといふ考へで出来た翫物は理屈は一應結構であるが、實際に子供が使つて見ると逆も消化の出来ないやうなものが多く自然に子供は手から離すのである、子供が翫物に依つて餘念なく遊ぶ其教育上の効果は、敢て心理學者の説明を待たないのである、翫物で遊ぶそれが子供の生活であるといふことも誰人も承知して居ることである、而して子供に眞の生活を與へ其自然の發達に資せんとする翫物は如何して得んとするか、それは子供の實際の活動の上から必然的に要求されることを基礎として其遊に便宜を與へ、其活動を有意義ならしめん目的で工夫するのである。又其作り出さ

れた翫物をどういふ風に子供に渡し、どう監督するか、それは唯綺麗に整頓して陳列して置き自由勝手に用ひしめるのである。それは先生が見てゐて充分必要と認められた場合にのみ手を出して手傳つてあげる、教へて上げる、毀はれた所具合の悪い所を修繕してあげる、全く保姆先生は介助者であり技師である、それから尙一つ大切なことは、子供は何か手に物を持たないと頼りないのである。會々ぼんやり突つ立つて居るもの寫眞や繪本を目の前で見せても、それでは決して承知しない必ず手に持つて見なければ見たやうな氣がしない、これは大人も同じである即ち遊んでゐないものは決して手に物を持たない寧ろ手を引つ込めてゐるものであるが、これ等には臨機に何か物を持たせることである、如何なるはにかむ子でも、又如何なる引つ込み思案の子供でも何か物を手に持つたら、もうそれから遊んでくるものである。又子供の發達程度に依つては唯手の頼りに物さへ持ちさへすればよい、何といふことではない、こゝにいふ場合に何をするといいふ目的はないのであるから車とか鐵砲とかいふものよりは唯の棒でも木片でもよいのであり。寧ろ無意義なものゝ方が子供が働

出すに自由である便宜であるのである、こういう場合もあることを知つてゐて、翫物を取換へてあげるといふことも實に大切であり。又世間では應用といふことはきちがひをしてゐるのでないかと思はれることがある。例へば子供は木銃を諸種に應用して使ふ、或時は木銃で擔へ筒、捧げ筒、立撃と戦争ごつこに使はれる、又或時は帯に挿して刀にし又或時は跛足の丁字杖に又或時は三挺も七挺も並べて橋に又或時はなぐり合の棒に又或時は土掘りに、子供の應用的能力を認めるのはよいが、この状態を喜ぶのは全く見當違である、これでは子供の頭をめちやくにするのである全く翫物が非常に足りない結果である、子供の生活を支へる翫物の貧弱からであるといふことに氣がつかねばならぬのである。

#### 八、神經質的遊び場から樂天地へ

子供はもう遊ぶのが仕事であるから面白くても面白なくても翫物があつて、も、なくても遊ぶ快活にも柔弱にも遊ぶのであるが、幼稚園で一日中容姿も崩さず著物の前もちやんとし手も汚さず喧嘩もせず素直に先生の言ふことを聞いて充分規律を守り大人しく遊んでゐるやうでは、もう神經質傾向に陥つて

ゐるのである、これが習慣となつて固疾的に身體に影響もするのである、而して從來の幼稚園では多少とも其傾向は免れないのである、此際幼稚園は幼兒の樂天地といふことにしたい、家より面白い所にした、そして天真爛漫に活動させ眞の發達を提供したい、それには唯翫物を豊富に與へるといふことで一切解決がつかうと思ふのである。

#### 九、義務形式に捕へるのからそれを味はせることへ

義務の修養と形式に馴れることは他日人となつて社會に活動する上に於て最も必要であるのであるから、幼い時から自然に苦なしに修養を積ませたいけれども從來のやり方は概ね人の教育上の必要といふ自覺よりは寧ろ多數の子供の監督上の便の爲めに義務を強い或型に嵌め込んでしまつてゐるやうに思はれる、かうなると幼兒は義務形式にいちげ込んでしまふのである、かうでなく何とか上手にして義務形式を味はせ漸次積んで人とならせたい、それには頭から義務であるぞ、形式は絶対に守れよでなく、幼兒の頭にも理解を有たせ義務形式に活かすべきである、一例を掲ぐれば。

(一) 幼稚園を病氣でもないのに缺席するのは惜し

い、それにどうも相濟まぬといふやうな心になつて厭と思つたときでも押し出て出席する、出席して見ると氣持もよく又決して厭どころでない面白い、來てよかつた。

(2) 自分で使つた翫物は片附けて置くは自分として心地がよい、それに幼稚園が亂雑でなく又後で使ふ人も好都合である。

(3) 幼さい子弱い子をかばつてあげるのは強い子だ善い子だ氣に入るやうにしてあげると心から感謝する。

(4) 規律を守るのは我々が習ふにも遊ぶにも便宜である、大勢が皆思ひ／＼勝手なことをしてゐては亂雑で喧騒で各々互に邪魔になるのである。

以上のやうな理解から毎日出席をする翫物を片附ける、幼い子を可愛がるのは我々の義務である。是等義務を満足に果たし規律を守ることに依つて我々は人たる修養を積むことが出来るのであるとこゝろいふ自覺を有りたい。

## 十、形式美から努力美へ

幼稚園で金にあかして庭園を作り室内を裝飾するといふのは先づ考へものである、それも貧兒専門の

幼稚園なら、せめて幼稚園を綺麗に飾りて自然に美感を養ふのもよいが、中流以上の家庭の幼兒を收容する幼稚園としては寧ろ不必要であると思ふ、子供は綺麗なお座敷や年中植木屋のは入るお庭では遊ぶことは出来ないものである、無雜作などころでなければ遠慮で遊べるものでない、現今中流以上の家庭でも子供を大事にする家には子供の部屋を設けてある實に遠慮のない部屋である、それにお座敷のお庭までも木は片隅に寄せるし石は拂はれて實に大人の生活には殺風景になつてゐるのである、幼稚園は即ち子供の部屋であるから無雜作で遠慮のない方がいいのではあるまいか。我々は其美よりは努力美といふことを大に發揮したい、即ち庭はもう廣い駆け遊ぶ庭にして間が隙がな掃除をして箒目を入れて置く、子供が散かした玩具は片附けて置く、それに玩物運動具にしても店で買つた體裁のよい弱いのよりは、出来れば先生が汗の油で作つた不細工な頑丈なものが多い、障子の破れは直ちに繕ふといふやうに、こんなやうに先生の努力に依つて園内及翫物を修理整頓して幼兒に自然に美として強い深い感化を與へ美の本體を握らせたい。



## 十一、幼稚園的の遊びから實際的遊びへ

幼稚園が現在の状態では概ね幼児に二重生活を強いて居る傾向がある、家での遊びは眞劍の進びで自分等の生活の爲に遊んでゐるのであるが、幼稚園では幼稚園の遊びの爲めに遊んでゐる、家での遊びとあるから、幼稚園の教育を家庭で崩す場合もあり又家庭の教育を幼稚園で毀はすといふ場合もあることは勿論である。恰も花の苗と雑草と一しよに生へてゐるやうなものであり。如何に花の方に肥料を施しても肝腎の花が吸はないで雑草に吸ひ取られて雑草にはびこられてしまつて花の苗はだんぐにさびて行くのと同じである。即ち遊びの不徹底からである。保育學から割り出された保育法よりは子供の實生活から割出す保育法を用ひ大人が強い遊びより子供の實際の遊びを出来るだけ多く幼稚園に採用して家庭幼稚園共通の遊びに遊ばせたい。

## 十二、眞似から創造へ

世界の日本が何時までも眞似の國で満足して居るべきでない、それには幼い時から眞似の遊び即ち人の眞似大人の眞似をして遊ぶ今日の状態から漸次指

導して創造的に生活せしむるやうにせねばならぬ、

現在の玩具は概ね大人の生活の眞似で既製のものか或は唯組み立てる位なものである、こんな玩物で何時までも遊ばして置けば折角の創造能力も退化してしまふのであるから、幼いときから色々工夫して自然に創造能力の發達を誘導すべきである、全體子供は何か自分で作るといふときの努力は大人が感心する位なものである。そして出来上つたときの楽しみは又格別である、こんな嬉しいことは自分で物を作つたとき以外には到底得らないであらふと思ふ程喜ぶものである。

又幼稚園の教課とも思ふてゐる手技といふことでも、又自由の遊戲に於ても、又玩物で遊ぶ時に於ても可成大人が指圖をし干渉をしたりせず可成幼児の各々が出来る丈で満足してあげることである。

## 十三、智識の教育から人の教育へ

幼稚園は元來人の教育であるべきである。然るに幼稚園が段々に形式的に流れる結果として智識發育に傾向するのであるが、もう心ある家庭では幼稚園は教へて困る今から教へられては頭を痛め神經質に陥るといふ議論の下に幼稚園を否定する人さへ出来か

かつてゐる状態である、若し幼稚園が智識教育に偏したら勿論幼児を毒するものである。幸にして世間の杞憂に屬することであるから、それ等の人には簡短に説明さへすればよいのである。但し同じことで遊ばしても、少しのやり方で世間が憂ふる智識教育にもなり、又人の教育といふことにもなるのである一例を擧ぐれば(フレーベル氏積木)。

(一) 大人が積方を教へて皆に其通りにさせやうとすれば無論智識の教育であるが、そう純然たる教授式でなくとも幼児の積方の上手とか下手とかいふことに先生の頭がこだわつてゐるやうでは智識教育である。

(二) 大人が積方を形式的に教へないことは勿論のことである。幼児の形式的成績如何にも頓著せず唯自由で積んで遊ばせばよい、子供は唯面白く自分の力一ぱいに積んで遊ばばよいのである。

唯左記の如く各自の個性の表現を鋭く観察して置いて人格養育の好資料とせねばならぬ。

(一) どの程度に積めるか、(二) 材料のこなし方。

(三) 工夫力の程度、(四) 材料の數量。

(五) 好美性(美の觀念、細かい事をする性質)(六)

創造の力。

(七) 辛抱、忍耐、持續性、(八) 好大性。

以上等個性的の長所短所。

十四、小學校の豫備的狀態から獨立必須の教育へ

全く家庭の考へ違ひから幼稚園が尠ならず迷惑を蒙つてゐる傾向がある、あの幼稚園へやつて置けば小學校へ無試験無抽籤で入學が出来るからとか、或は幼稚園へやつて置けば小學校へ行つて萬事好都合である。團體的にも先生制度にも學校風にも友達に馴れ、それに唱歌も遊戯も手工も一通り出来るやうになるから學校が樂であるとか、こういふやうな實になさけない目的で幼稚園へ入れる家庭も決して少なくない状態である。固より家庭が幼児教育の趣味が低いのと未だ幼稚園を信賴する力が出来てゐないから起ることであるが、幼稚園としても何時が家庭が幼稚園を信する力が出来るであらうかなど考へて安閑と待つて居るべきでない、國家教育の爲めに進んで幼児教育の宣傳もし又機會を作つて家庭の誤解を反るやうに幼稚園が總掛りで内的活動にも外的交渉にも充分盡力すべきの秋である。